
コスモスのように・・・

玉篠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「スマスのように・・・

【Zマーク】

Z5953Y

【作者名】

玉篠

【あらすじ】

とある国の伯爵令嬢・ブランカは、自他共に認める変わり者。人付き合いが苦手で、ひたすら孤独を愛する彼女が選んだのは、間もなく即位するであろう新皇帝の後宮入り。

日陰者として、後宮の片隅で好きなことをやりながら生きていけると思ったのだけど・・・

ひょんな事から、新皇帝こと現皇太子の目に留まってしまって・・・

プロローグ

薄暗かつた手元が、ぱつと明るくなつた。

その明るさに、プランカは刺繡をしていた手を止めるべく、おもむりに頭を上げ、明りを点してくれた世話役の女中に向かつて

「アンナ、もうこんな時刻だったの？」

と、尋ねた。

明りを点し終えた女中のアンナは、にっこりと笑うと

「お嬢様は夢中になつて刺繡をなさつておいででございましたから……」

プランカは、照れくわざつに微笑むと、テーブルの上に置いてある見知らぬ箱に気づく

「アンナ、あの箱は？」

「お嬢様が後宮入りするときによくお召しなられるドレスが、先ほど届いたのでござりますわ。ご覽になれますか？」

プランカは、そつと首を横に振ると、

「もう暗くなつてきているから、明日にするわ。

そつか……私、もうすぐ皇太子殿下の後宮に入るのよ……ね

どこかわざわざとした口調で言つと、再び刺繡を始めた。

第一話　変わり者の伯爵令嬢

ブランカはこの国・・・ロルカ帝国の海岸地方を治める貴族 ウエスカ伯爵の長女だ。

八人兄弟の一一番上で、下に、三人の弟と四人の妹がいる。

兄弟が多いこともあって、両親はブランカの事をあまりかまわなかつた。

愛されなかつたわけではない。

欲しいものは大抵与えられだし、望めば大抵の事は（ 時間はかかるたが ） かなえられた

家庭教師から、貴婦人として必要なきちんとした教育も受けたこと

が出来た。

絵が趣味だった父は、ブランカに絵の描き方や色に寄つて違う絵の具の特徴を。

母は、刺繡の技法を教わつてはいた。

が・・・

何故か、ブランカの心は覚めていた。

弟たちや妹達のように、両親に甘える事もあまりなく・・・
どちらかと言えば、ブランカを育ててくれたのは、一緒に住んでいた母方の祖母・カルビア伯爵夫人だつたかも知れない。

祖母は、ブランカに、色々なことを教えてくれた。

ドレスの縫い方

編み物やレース編みのやり方

公式行事の時の調度品の選び方から、テーブルウェアの選び方
旅行に行く時の、トランクのつめ方まで。

妹達が知らないことまで、一通り教えてくれた。

そのにともあって、ブランカは、貴婦人としてのたしなみは備えていたのだが・・・

年を経るに従つて、大勢の人と交わることを拒むようになつていったのだ。

幼い頃に暮らした屋敷の近くに、ブランカの遊び相手となるような年頃の貴族令嬢がいなかつた事も原因のひとつだろうが

いつも屋敷の中で、召使をも遠ざけて。

一人、刺繡をしたり、歴史物語を読んだり、気が向けばハープを奏でたりして日々をすごした。

たまに出かけることもある。

が、両氏の許可をもらつてはいるものの、供一人連れず・・・まるで召使か下働きのような姿で辻馬車を乗り継ぎ、帝国内の旧跡や古い神殿に詣でるのだ。

女の一人旅が安全でないことはわかりきってはいるのだが、ロルカ帝国の国内は割りと治安がよくて。

ここ数年、豊作も続いていることもあり、今までこれといった危険にさらされたことはなかった。

マントから顔をひょこんと出し、

「 ディセーの神殿への巡礼に行くのですが・・・」

といえば、民も笑顔で話しかけてきたり、ブランカの質問に応じたりしてくれる。

そんな一回限りの会話が、ブランカは好きだった。

自他共に認める

変わり者の伯爵令嬢・ブランカ

両親は、苦々しく思つていいようだが・・・
ブランカ自身は全く気にしてはいなかつた。

第一話 それは、突然に

自他共に認める 変わり者の伯爵令嬢 ブランカ・デ・ウエスカ
孤独を愛するがゆえに、舞踏会だの夜会だのにはあまり出席しなかつたが、どこでブランカの姿を見かけたのか
それとも、そこそこ財力があるウエスカ伯爵の援助目的か
理由は定かではなかつたが、年頃になつたブランカに求婚してくる貴公子は、そこそこいた。

特に、表面上はにこやかな笑顔で舞踏会に出席した翌日などは、ブランカ宛の花や菓子、装身具などの多くのプレゼントが、手紙とともに伯爵家に届けられるくらいだった。
しかし・・・

ブランカは、それらの手紙に型どおりの返事をするだけにとどめていた。

勿論、ブランカ自身もわかつてゐるのだ。

自分が早く嫁がねば、四人の妹達の縁組に支障が出る事くらいは。でも、かなりの恋愛小説を読みこなしていたブランカにとつて、恋愛とか結婚などと言つものに、いまひとつ興味がわからず、求婚してくる貴公子たちを異性としてみる」とは出来なかつた。

ブランカが20歳になり、そろそろ両親もブランカの結婚の事を本気で悩むようになつてきていた、ある年の初め。

前年の夏に第一后妃を失つて以来、病の床に臥されていた皇帝陛下が崩御なされた。

第一后妃の後を追つよるな、皇帝陛下の崩御。

皇族は、一年の間

それ以外の貴族や平民は、二ヶ月の間、それぞれ喪に服すよう、お触れが出、

崩御から一ヶ月後に、盛大な葬儀が行われる。

政務を滞らせるわけにはいかなかつたから、崩御の三日後に皇太子は、践祚>>せんそく<<（皇帝が崩御なされた後、皇太子が即位までの間、皇太子の身分のまま政務を執ること）なされ、皇太子の身分のまま政務を執られるようになられる。

皇太子が正式に皇帝として即位する戴冠式は、前皇帝の喪が明ける一年後の春と定められ、

同時に、新皇帝・・・つまり、現皇太子の後宮つくりが始まられた。皇帝の戴冠式と第一后妃の戴冠式を別々に行つことは、財政面から見ても無駄が多い。

それならば、同時に行つてしまえ・・・
と、言うわけである。

新皇帝の後宮つくり

後宮をはじめとした宫廷内部の事を司る宮内庁は、早速、新皇帝の正室と側室にふさわしい女性を集めるため、13歳～24歳までの娘がいる貴族の元に、娘の後宮入りを進める手紙を発送した。

その中に、勿論、ブランカの後宮入りを進めるウエスカ伯爵宛の手

紙もあつた。

ブランカの事は宫廷内でも評判になつてゐたから、知らないはずはないのだが・・・

一人の役人が

「もしや新皇帝は、変わり者の娘を『ご所望かも知れませんぞ』と、言つたことから、ブランカにも後宮入りのチャンスが与えられることとなつたのである。

朝食の席で、前触れもなく両親からその話を聞いた時、

ブランカは少し驚いたが、

「お父様、そのお話、進めて下せりませんか？」

と、返事をしたのだ。

食後のコーヒーを飲んでいたウエスカ伯爵・パブロは、カップをソーサーの上に戻すと

「本当にいいのか？　ブランカ」

と、問い合わせる。

ブランカは、パンに手を伸ばしながら

「私はいづれ嫁がねばならないのでしょうか？」

でしたら、後宮だろうがどこかの侯爵様だろうが同じではありますか？」

と、笑いながら言う。

伯爵は満足そうに頷くと、隣に座つてフルーツを食べていた伯爵夫人・ナターリアに向かつて

「ブランカが承知したのならば、ナターリアもいいね」

と、念を押すように言った。

「わあ・・・お姉さま、后妃様になるんだ」

「ねえ、后妃様になつたら、私も宫廷に招いてよね、ね」

ブランカの妹達が、口々にはやし立てる。

「 これこれ、まだ本当に決まったわけではありませんよ。
後宮入りするためには、これからいくつつかの試験があるのでですから

『

ナターリアがたしなめたが、妹達の騒ぎはなかなか収まらない。

そんな中、ブランカは全く別の事を考えていた。

『 これで・・・ようやく一人で好きなことが出来るわ・・・』

と。

第三話 後宮入内試験

ウエスカ伯爵令嬢・ブランカは後宮へ入内（じゅだい。後宮へ入ること）する意思があると、言うことが宮内庁へ返事を出してから10日ほど経つた、初夏と言ひにはまだ早いある日の朝。

宮内庁管轄の迎賓館の一室に、ブランカの姿があった。

いや、ブランカだけではなかつた。

貴族の令嬢と思われる、数人の娘達も一緒だ。

ここに、これから後宮への入内に関する試験が行われる事になつていた。

いや、正式にはこの試験は一次試験・・・本試験とも言われるものだ。

一次試験とも言つべき予備試験は、入内の意思があると宮内庁へ出してから間もなく行われていた。

予備試験は、いわゆる書類選考と身辺調査である。

領地に重税を課してはいないか

三親等以内の身内に、大臣や司法長官など、特定の権力に直接結びついている者はいないか

財力はどうか

などが、事細かく調べられ、ふるいにかけられて。

残つた令嬢が、今、ここに集められ、本試験に望むのだ。

本試験の内容は、礼儀作法や歴史、地理、外国語などの筆記試験と、ピアノやフルート、ハープなど好きな楽器の演奏それに歌唱である。

勿論、楽器の演奏の時は、試験会場に入つてから出て行くまでの立ち居振る舞いも試験の対象となつていた。

ブランカは、筆記試験の方は無難にこなしていた。

外国語はさつぱりだつたが・・・

歴史や地理の問題ともなると、すらすらとペンを走らせた。

そして楽器の演奏なのだが・・・

ここではちよつとしたハプニングが起つた。

マンドリンを奏でる予定だった、ブランカの前の番の令嬢が、うつかりマンドリンを奏でるために必要な鼈甲のピックを忘れてしまっていたのである。

運悪く、試験会場にはお付きの侍女はつれてくれることが出来ない。

「くすん・・・くすん・・・あのがないと、マンドリンが演奏できないうわ」

令嬢は、控え室で泣いた。

「お父様もお母様も、我が家の名誉だからつて、入内を喜んでくださつてゐるのに・・・

私が試験に失敗したら・・・

どれほどお怒りになられるか・・・」

くすんくすんと泣く令嬢を見てはいるのだが、他の令嬢は彼女を蔑みの目で見てはいても、助けを出すものはいなかつた。

ここにいる自分以外の者、全てが、競争相手なのだから。

泣きじゃくる令嬢に、プランカはそっと近寄った。

プランカは一応、マンドリンの心得はある。

だから、万が一のときに備えて、ピックを持って来ていたのだ。

そのピックをそっと令嬢に差し出すと

「これでよかつたら、どうぞお使い下さい」と、手渡した。

令嬢は、驚いたようにプランカの顔を見ていたが、すぐに顔を明るくすると、そつとピックを受け取り

何度も頭を下げながら、ドアの向こうに消えていった。

数日後。

ウエスカ伯爵家に

ウエスカ伯爵長女 ブランカ・デ・ウエスカ を、新皇帝陛下の配偶者候補と定め、正式に後宮へお迎えする

との、宮内庁からの命令書を携えた使者がやつてきた。

第四話 入内の日

宮内庁からプランカの入内許可が正式に下りた日から、ウエスカ伯爵家は、プランカの入内に向けてにわかに慌しくなった。

プランカの嫁入り支度は、プランカが年頃になつた15歳頃から、少しずつ進められていたのだが・・・
嫁入り先が新皇帝の後宮である。

伯爵家の対面上、恥ずかしくない支度を調べなくてはならない。
それも、プランカをはじめとした後宮入りの許可が下りた娘達の入内日の日は、どういう理由からか、
夏の終わりの某日

と、宮内庁から通達があつたため、支度を調べる期間は約3ヶ月しかなかつた。

入内許可が下りた日に、宮内庁から渡された心得書と支度についての覚書のようなものには、
実家から後宮へ連れて行く事が出来るお付きの侍女は一名に限る
と、記載されていたので、それも選ばねばならない。

もつとも侍女については、プランカの乳姉妹であるアンナが、自ら名乗りを上げてくれたため、困ることはなかつたのだが。

食器をはじめとした銀器

陶磁器のティーセット

お化粧道具

礼服や普段着などのドレス類

それに靴

仕立て屋や商人達が、毎日のように屋敷に出入りし、伯爵や伯爵夫人がこまごまとした指示を出していく中、ブランカだけはいつもどうりの様子で。

侍女のアンナをも遠ざければ、刺繡やレース編みなどをひつて日々を過ごしていた。

一つだけ違うよつこなつたのは、プランカが読む本が、宮内庁から渡された

後宮での礼儀作法の指南書

後宮での心得書 が、多くなつたことだろうか。

『 どうせうちの身分は伯爵だし・・・入内試験の時に見かけた他の令嬢みたいに皇太子殿下の第一后妃にならなければ・・・なんて事もない。』

日々調べられていく支度を見ながら、ブランカだけは他人事のようにそんなことを考えていた。

やがて、時は過ぎゆ。

ブランカの入内の日となつた。

整えられたブランカの嫁入り支度は、宮内庁の役人の確認の後、3日前に既に後宮へと送りだされていたので、この日、ブランカは身一つで後宮へ向かうこととなつた。

その日。

ブランカは朝早くに起こされ、普段は母についている侍女達の手によつて、香油を少したらしたお湯で体を拭かれ、ドレスを身につけさせられた。

普段はあまりしない化粧も、今日ばかりはきつちりと施されていく。髪も何度も梳かれ、ブランカが好きな香りの香油を使って結い上げられた。

所定の時刻

ドレスの上に、旅行用のマントを羽織り、すっかり支度も整つて伯爵邸の玄関に姿を現したブランカ。

「お姉さま、綺麗！！」
「お姉さま、お幸せにね」
「ブランカ・・・つらくなつたら、いつでも帰つて来ていいんだよ」

妹達や祖母のカルピア伯爵夫人と別れの言葉を交わし、両親からは軽い戒めと祝福の言葉をかけられ・・・

ブランカは、王宮から差し向けられた馬車の人となつた。

向かいの席には、後宮でブランカの身の回りの世話をするアンナと宮内庁からブランカを迎えて来た、女官のフローラル侯爵夫人が、緊

張した表情で座っている。

第一后妃としての入内ならば、両親の同行が許されるのだが・・・
プランカの入内は、あくまで

新皇帝の第一后妃候補

と、しての入内であるため、両親の同行は宮内庁から許されなかつた。

「 もよおしなり・・・は言いません。
行って参ります 」

プランカがそういうと、馬車のドアが閉められ
王宮に向かつて、馬車は走り出した。

第五話 後宮・・・(前書き)

プラン力視点でのお話を

第五話 後宮・・・

入内の支度を整えた私は、両親や兄弟姉妹、祖母と別れの挨拶を行うと、王宮から差し向けられた馬車に乗つた。

王宮・・・といふか、宮内庁から私を迎えて来た女官のフェロル侯爵夫人と、後宮で私の世話をしてくれる侍女のアンナも一緒だ。

あらかじめ渡されていた入内の順序によると、馬車はまっすぐ王宮に向かわず、まず、都の郊外にある離宮

『 メニーナ宮殿 』

に行き、そこで小休憩をとるらしい。

なんでも、数代前の皇帝の皇后・・・第一后妃で、『 国母 』と、今も称えられる マルガレータ皇后ショウヒが妾妃シテヒだった頃、この離宮で暮らしていたことから、皇帝の後宮に入内する娘達は必ずこの離宮に立ち寄つて、小休憩をすることが慣例となつたそうだ。

でも・・・

今日は、私以外にも数人の貴族令嬢が、皇太子殿下カミタツキジンもとい新皇帝陛下の後宮に入内することになつてゐる。

離宮とはいへ、入内する令嬢同士が同じ部屋でぱつたり出合う・・・なんてことにならないといいけど

なんて思つていたら、フェロル侯爵夫人が、その疑問に答えてくれた。

離宮に到着する時間と、王宮に到着する時間は、入内する令嬢について少しづづらしてあるため、入内する令嬢同士が離宮で出会うことはないんだそうだ。

あ、納得。

メニュー宮殿で、紅茶とお菓子の供應を受けたら、いよいよ王宮へと向かうこととなる。

フェロル侯爵夫人が、私が退屈しないように話しかけてくれるが、私ははつきり言つてそれどころではなかつた。

だつて、この馬車、やたら上下に揺れるんだもん。

いえ、揺れる原因は馬車じゃなくて。

本当は石畳の道にあるんだけどさ、がたがた上下にゆれる馬車に乗つていると、馬車に慣れている私ですら乗り物酔いしそうになつてしまふ。

アンナやフェロル侯爵夫人は、よく乗り物酔いしないなあ・・・

なんて思いながら、ちらりと侯爵夫人の顔を見たら、侯爵夫人も少し青ざめていて。

「 次に令嬢のお出迎えの任を賜つたら、メニュー宮殿から王宮までは別の道を通つてもらいましょう 」
と、小声で言つていた。

やがて、馬車は王宮に到着した。

見慣れない門から、私を乗せた馬車は、王宮の敷地内に入る。
なんでもあの門は『月の門』と言つて、入内する令嬢専用の門だそうだ。

大きな建物の前で、アンナの介添えの下、馬車を降りる。
と、そこには、きつちりとした礼装の初老の男性と、黒の宫廷ドレ

スをまとつた貴婦人が、数人の侍女とともに立つていた。

私はマンティラを脱いでアンナに渡すと、それを合図にフェロル侯爵夫人が一人の前にすすんで頭を下げ

「ウエスカ伯爵令嬢 ブランカ様を、お連れいたしました」

と、挨拶をした。

私も軽く頭を下げる、ドレスの裾を軽く広げた姿で挨拶する。

「ウエスカ伯爵 パブロ・ホセ・デ・ウエスカ が長女 ブランカでございます。

このたびは皇太子殿下のお傍にお仕えいたす名譽を賜り、光栄でござります」

「ようこそ、ウエスカ伯爵令嬢。

私は皇太子殿下付きの女官長を務めております、イサベル・マリア・デ・クエンカと申します。

こちらは、皇太子殿下の侍従長であるアランフェス子爵。ウエスカ伯爵令嬢の入内を、心からお喜びいたします」

女官長の型どおりの挨拶を聞き終わると、私は女官長の先導の元、これから暮らす住まいへと案内された。

そこは、

後宮

と、言つても、女官長や上級女官といった高位の女性達が暮らす建物だった。

「 こんな所で暮らさねばならないの？」

と、アンナは文句を言つていたが・・・
新皇帝の后妃や妾妃のための後宮の建物は、現在、改築中だとかで。
戴冠式までには整うから、それまでの間、入内した全ての令嬢達は、
この後宮女官用の建物で生活することになつてゐるのだそうだ。

その建物は、南北に貫く建物が一つあり、その建物を中心として、
そこから東西に4つずつ翼のような建物が伸びていた。

私が与えられた区域は、『王』に似た形をした建物（正確には横棒が一本多いが）の、南から一番目西側の翼だった。南側は庭園に面しており、また図書室も近い。

翼の付け根の部分には、私付きの女官に任じられたフェロル侯爵夫人の住まいがあつて。

私としては、少し緊張していた。

とにかく、しつらえられた部屋に入り、ドレスを脱いで普段着のドレスに着替える。

皇太子殿下に、初お目通りするのは明後日の朝。
どんな方なのだろうか？？？

ま、私はここで静かに暮らせればいいから、寵愛を賜りうが賜るまいが、どうでもいいけどね。

第五話 後宮・・・(後書き)

馬車の上下振動が半端じゃないのは、実話です。

第七話 ひとつめの話・・・お見聞だよ（前書き）

ブランカ視点のお話です

第七話　とつあえず・・・お目見えです

後宮に入った一日後。

私達入内した令嬢達は、新皇帝陛下 もとい 現在の皇太子殿下に初のお目見えをすることになりました。

それと言うのも、皇帝陛下は毎朝一度、後宮内にある神殿に礼拝することが決まりになっていたからでして。

その時は、いわゆる『お目見え以下』の、召使達と近習の女達を除く後宮に仕える女性たち全員が、神殿までの廊下の左右に並んで、お出迎えすることになっていたからです。

あ、『お目見え以下』の召使 や 近習』 と、言いましたが、実は女性の使用人には4種類あるんですよ。よく混同されるんですが・・・

先ず、によかん女官

この方々は、基本的に貴族の令夫人か令嬢が就任し、

役目は女主人に行儀作法や舞踏会の時の面会相手を教える事や、話し相手、外出の際のお供、手紙や書物の朗読や代筆などです。

私の場合だと、フェロル侯爵夫人がこの役割です。

次に、侍女じじょ

下級貴族の令嬢達や、平民でも上級クラスの女性達が就任することが多く

役目は女主人の化粧や結髪、衣装の着付け、来客の取次ぎ、食事や茶菓の給仕、それに女主人を連れるほどでもない場所へ女主人が出向くときのお供などです。

私の場合では、アンナがこれに当たります。

三番目は、きんじゅ近習

侍女同様に、下級貴族の令嬢や、平民でも上級クラスの女性達が就任することがほとんどで

役目は侍女とほとんどがかぶつており、女主人が洗面や湯浴みをする時の介添えや、化粧や結髪の手伝い、衣装の用意、食事や茶菓の給仕、女主人が外出する時の乗り物などの手配などです。入内した私には、宮廷からこの近習の女性が一人、つけられました。

最後が、いわゆる めいしつかい召使

平民の中級クラス以下の出身者（と、言つても、身元確認はきちんとなされていますが）で

役目は掃除、洗濯、靴磨き、厨房から食事を運ぶこと（後宮では召使を含む全員の食事は、専門の厨房で調理されます）洗面や湯浴みの時の浴室や洗面所の支度など、雑用全般を行います。入内した私付きの召使となつたのは、四人です

さて、余計なことを話してしまいましたが・・・

皇帝陛下が行つていた毎朝の神殿への礼拝は、前皇帝陛下が崩御されたため、現在は皇太子殿下が行つておいでです。

もつとも、現在の皇太子殿下は、お父上であらせられた前皇帝陛下の喪に服しておいでじざいますから、神殿への礼拝は毎朝ではなく、月に3度ないし4度なのだそうです。

しかし、この朝の礼拝の時こそ、私達入内した貴族令嬢にとつては皇太子殿下のお目に留まるチャンスなのです。

お目に留まって、首尾よく夜のお相手を務めることができ・・・方が一ご懐妊なんてことになりましたら、戴冠式の折に第一后妃とな

る可能性はぐっと高くなるのですから。

まあ、私にとつては、

皇太子殿下に初お目見えする儀式
くらいの事でしたが。

アンナや近習の女性、フェロル侯爵夫人はやたら張り切つてしまいまして。

私を飾り立てようとします。

しかし、私は飾り立てられること自体は嫌いではありませんが、前皇帝陛下の喪中と言つことも考慮しまして。

ドレスは生地は超一級品ですが色は黒に近い物を選び、アクセサリーもシンプルな物にしました。

カラーン・
カラーン・

神殿の鐘が鳴っています。

いよいよ皇太子殿下・・・アルフォンソ皇太子殿下が、神殿に続く廊下へおいでになられるのです。
表御殿と後宮を結ぶ、唯一の門の扉。

そこから少し後宮内に入った神殿に続く廊下の左右に、私をはじめとした入内した令嬢達や女官達、侍女達が並びました。

私は女官長のクエンカ侯爵夫人の指示に従い、表御殿側から見て右手の一一番目に立ちます。

鐘の音が聞こえてから、待つことしばし

アルフォンソ殿下が、廊下へと姿を現されました。

「 皇太子殿下、二日前に入内いたしました后妃候補の令嬢達が、
本日よりお出迎えに加わることになりました。
どうか、お言葉をお願いいたします。」

ドレスの裾を広げ、頭を下げておられる私達に、クエンカ侯爵夫人の声
が聞こえています。

「 殿下、ご紹介いたします。」

ウエルバ侯爵令嬢 アデーラ・デ・ウエルバ様でござります。」

衣擦れの音とともに、私同様に入内した令嬢達が紹介されていきます。

「 パラカルボ侯爵令嬢 カロリーナ・デ・パラカルボ様
「 ウエスカ伯爵令嬢 ブランカ・デ・ウエスカ様 」

私は三番目に紹介されました。

下げていた頭を軽く上げ、皇太子殿下のお顔を拝見した後、また深
くお辞儀をします。

皇太子殿下は、微笑んだまま

「 よろしく 」

と、私にお声をおかげになられ、前を通り過ぎていかれました。

ま、こんなものですよね。
初お目見えなんて。

入内した令嬢達は、私以外にも七人いるのですから。

その後、

オリウエラ伯爵令嬢 クリストイネ・デ・オリウエラ様

アビレス伯爵令嬢 コンスタシア・デ・アビレス様

リナーレス子爵令嬢 ベアトリス・デ・リナーレス様

ハエン子爵令嬢 ローサ・デ・ハエン様

ヘタフェ男爵令嬢 ソフィア・デ・ヘタフェ様

と、続きましたが・・・

皇太子殿下のお言葉は、私と全く同じものだったのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5953y/>

コスモスのように・・・

2011年11月24日13時45分発行